

地域貢献を念頭に置いて世界へ

時代の変化をつかんで、独自の開発技術を展開。

日東建設株式会社 代表取締役社長 久保 元（くぼ はじめ）
 Profile 1951年札幌市生まれ。75年日東建設株式会社に技術主任として勤務。77年同社専務取締役。94年同社代表取締役社長に就任。



コンクリート構造物の非破壊検査装置（コンクリートの圧縮強度測定、劣化判定、はく離判定）のコンクリートテスター（CTS-02V4）。希望小売価格60万円（税別）ハンマーでコンクリートを打撃し、その時の打撃力波形から機械インピーダンスを測定、コンクリートの圧縮強度、劣化度合い、はく離度合いを推定する



DATA
 【日東建設株式会社】
 本社：雄武町
 1973年3月設立。おもな営業種目は土木工事業、土木コンサル業、装置販売業。



12年7月3日～5日イギリスエジンバラ国際会議にて、外国人にCTSの技術を説明する境氏
 12年1月24日～27日アメリカの販売店と共にラスベガスの展示会に出展



12年8月20日～22日台湾の工業大学を訪問、技術説明を行った

世界のオンリーワンを目指す

JETROのサポートで販路拡大

タイミング

ジェットロ

Point

コンクリートは補修する時代へ

土木建設業を営んでいた久保氏は、公共事業の激減による余剰人員問題をどう打破しようかと悩んでいた。地元には他に働き先も少なく、解雇は最後の手段。現状を打開することを模索する毎日だった。

そんな時、99年6月に福岡トンネル内でコンクリート塊落下による鉄道事故が発生。このニュースを見た久保氏は、もはやコンクリートは壊れる時代が来たのだと直感した。今まではスクラップ&ビルドの時代だったが、国も地方も財政状況は悪化していることを考えると、これからは建物を長寿命化させることが課題となるだろう。そのため、コンクリート強度の検査機器への需要が高まっていくだろうと久保氏は考えた。

現在、一般的に使われている検査機器は、測定精度や操作性の問題がある。「誰でも簡単に使えて精度の高い検査機器はないのか」と久保氏が考えてい

リカの検索エンジンでヒットするよう対策を行ったところ、海外から問い合わせが増えていった。先進国も途上国も関係なく、コンクリートを使っている場所などどこでもニーズがある。想像以上の海外からの反応に久保氏は驚いたという。久保氏はさらに製品への自信を深め、翌11年には、高強度コンクリートの強度測定を可能にした「CTS-02V4」を開発。今なお、ユーザーからの意見や要望を集めてバージョンアップに励んでいる。

海外に販路の拡大を求めて

海外との取引を行おうとすると、多くの企業が突き当たる課題に、言葉の問題がある。商談会等で技術的な話をしなければならぬシーンでは、極壇先生や境氏の協力を仰ぐことができたが、商取引、特に契約の話ではそうはいかない。海外との取引の経験がほとんど無かった同社は、それまで契約書を日本語のみで作成してきた。それでも特にこれといったトラブルもなく取引を行ってこられたことから、そこに問題意識を感じて来なかったという。

しかし、ジェットロに指導を受けたところ、「これではいざという時に、こちらの立場が弱くなる可能性がある。曖昧な日本語での契約ではダメだ」とアドバイザーから厳しく指摘された。「自社の考えをはっきりさせるためにも、保証期間や内容などの取り決め事項は、やはり英語を標準にしないと、訴訟などで国際的に立場が弱くなってしまふ」。久保氏はこれを重く受け止めた。以後、

たところ、母校・東海大学の恩師である極壇先生と建設技術の開発などに携るアドバイザーサチ株式会社・代表の境氏が、コンクリート調査機器にかかる共同研究を行っていることを知る。久保氏はさっそく両氏のもとを訪れ意見を交わし、03年7月に共同で研究開発プロジェクトを立ち上げると、試作品の開発に着手。04年3月、ついにコンクリートテスター（以下、「CTS」）の第1号機（プロトタイプ）を完成させた。

世界共通のニーズを発見

05年4月の全国販売開始から現在12年11月）までにCTSを約400台出荷し、今では世界からも引き合いがあるが、最初は赤字だったという。海外から引き合いがあったのは05年。日本と同様にコンクリートの老朽化に悩む韓国からの話だった。

11年には同社の取り組みが、ジェットロの輸出有望案件発掘支援事業の支援対象企業として採択され、専門家のアドバイスを受けた。スタッフに海外との契約書作成にあたっては、英文でしっかりと自社の考えを記載するよう指示。現在では、翻訳の外注やジェットロのアドバイザーなどの力を借りながら、海外との取引を行っている。海外展示会に参加した際、同社スタッフだけでも製品説明が行えるよう、社内で英会話の勉強会を開くなど、意識改革にも取り組んでいる。こうした取り組みを踏まえ、同社では今後、海外からの照会や契約手続きを専門に行う部署を創設し、社内体制を強化。より多くの海外ニーズに応えていく予定だ。

また、ものづくり企業の宿命は模倣品対策。同社はCTSの測定原理について国内特許を05年に取得済みだが、国際特許は取得していない。久保氏は、自社のためにも知財保護は重要と考えている。そこで現在、模倣品対策として、商標登録やさらに改良を加えたバージョンアップ品を投入することでシェアを確保していく方針だ。

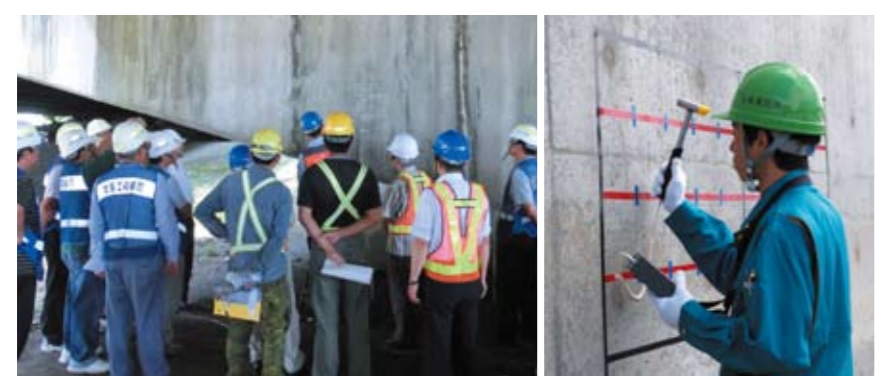
CTSで世界標準を目指す

共同開発から10年。ここまで走ってこられた原動力は何だったのか。「CTSの開発の時、多くの知人から『せめて本社を札幌か東京に移さないと信用されない』と諭されたこともあった。『田舎の会社でも世界を相手に仕事ができる。建設業が元気がという証明をしたかった。久保氏は自分を育ててくたこの町へ、会社を成功させることによって恩返ししていきたいのだとい



My Reflection

座右の銘は「人生は一生勉強。みんなビジネスのアンテナを持っていると思う。勉強しないとアンテナが錆びてしまうので、ピカピカにしておかないと。ピカピカ光るアンテナはビジネスチャンスをつかまえることができる」。今回のCTS開発も久保氏がまさにアンテナを光らせていたからこそ。



12年8月20日～22日台湾でのデモンストレーションを実施
 コンクリートの表面を打撃するだけで簡単に測定できる